

大学入学共通テストの探求①

連載開始にあたって

蒼下和敬、後藤泰彦、宅島大堯、首藤慧真
井上明日香、中村秀司、山口裕平

一 はじめに

この連載は、高等学校で地理の指導をしている現職教員を中心に、今年度はじめて実施された大学入学共通テストの地理がどのように出題され、どのような学力を求めており、そして、どのような指導が必要となってくるかを探求するものである。

当初は、本会「担当者から、一個人としてのレポートで依頼を受けていたが、本稿を作成するために、様々な先生方から感想や意見を伺う内に、実に多様な捉え方や思いがあることを改めて感じ、「多くの方と共通テストを解き直して、分析してみたい」という思いに至った。

今回の連載では、まず、あとに紹介する先生方で分担して、担当問題を分析して発表し、それについて自由に意見を出し合い、出題された問題の特徴や求めらるる学力等を検討する。予定は

次の通りである。

・第1回①はじめに、全体概要

②地理B第1・2問

(蒼下和敬 下関南高校)

・第2回③地理B第3・4問

(後藤泰彦 佐倉高校)

④地理A第1・2問

(宅島大堯 広島大・院)

・第3回⑤地理A第3・4問

(首藤慧真 広島井口高)

⑥第1・2日程第5問

(井上明日香 川崎高校)

・第4回⑦第2日程B第1・2問

(中村秀司 鳥取西高校)

⑧第2日程B第3・4問

(山口裕平 上五島高校)

この連載では、多くの方が参加可能な開かれたものにしたいたいと考え、誰でも自由に気づきや意見を表明できるように試みる。参加方法については、次の担当者にご連絡をお願いします。

連絡先：中村秀司(鳥取西高)

nakamura_sui@gt.rikyo.ed.jp

地教研には、このような機会を提供していただき、厚くお礼申し上げます。

二 共通テスト地理の概要

今年度はコロナウイルスの影響で試験は第一日程、第二日程が設定された。大学入試センターによれば、第一日程の地理Bは138,615人が受験し、平均点は60・06点、第二日程は395人が受験し、平均点は62・72点であった。昨年のセンター試験地理Bの66・35点と比べると、点数的には難化したことになる。

ここでは、受験者の多い第一日程の地理Bを中心に概要を振り返る。大問は「世界の自然環境」「産業」「都市と人口」「アメリカ合衆国の地誌」「宮津市の地域調査」の5題で構成され、従来の6題から再編された。また、解答すべきマークの数は35から32に減少した。一方、ほぼすべての問題に図や表、写真が示され、資料から読み取って得た情報を基にした考察や学習により得た知識と資料を関連づけた考察を求めている。従来見られていた、分布や特色などの知識の正誤を問う問題はほぼ見られなくなり、一問一問の負担は大きくなっている。

戸惑い焦った受験生も多かったと聞く。

続いて、共通テストがどのような力を問うたのかを探るため、各問を次の通り分類した。①既得の知識を用いて分類したり正誤を判定したりする「知識の再生」または単純な「読み取り」の力を問う問い。②既得の知識または読み取った情報を基に個別性の高い特定の事象について推論する力を問う問い。③既得の知識または読み取った情報から一般化されたものを用いて応用的に推論する力を問う問いの3通りに分類した。結果は、①が3問(平均正答率86%)、②が20問(64%)、③が9問(57%)であった。単純な知識問題よりも応用的な力を問う問題の方が正答率は低い傾向にあり、出題バランスも傾向は近年の大学入試センター試験と変わっていない。つまり、共通テストでは出題スタイルに変化は見られているが、問われている力は現行学習指導要領に明示された方針を引き継いでいるといえる。(蒼下)

※正答率は、ベネッセ「大学入試共通テスト徹底分析」を基に算出している。